

ガラテヤ人への手紙 6 章 1 節をお開き下さい。いよいよ最終章に入りました。このガラテヤ人への手紙はアウトラインによれば 3 つに分けられる。3 つのセクション、3 つのブロックに分けられるということを繰り返し皆さんにはお伝えしてきました。まず第 1 番目のセクション、1 番目のブロックは、1 章 2 章です。全部テーマは恵みです。恵みを軸にアウトラインを 3 つに分けたわけです。そしてその第 1 番目のセクション 1 章 2 章は、恵みに関してパウロの個人的経験というものがまとめられておりました。恵みの個人的経験。2 番目のセクションは 3 章 4 章です。それは恵みに関するパウロの教理的教育的教育というものです。そして 3 番目のセクションは 5 章 6 章。今日はその 6 章に入っていくのですが、そこではパウロの恵みの実践的適用という内容となっております。ですからもう一度そのアウトラインも思い起こして頂いて、先ずはパウロは恵みに関して自分の個人的な経験・体験を語っております。そして次に恵みとは何か、教理的な説明をしながら教えようとしているわけです。そして最後にはその教えを実際にそれぞれに当てはめるように、具体的な状況場面においてこの恵みを活かしながら、この恵みの下に留まりながら、恵みによって行動すること、実践的な適用というものを勧めているわけでありませう。

早速ガラテヤ 6 章 1 節をお読みします。『兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。』『兄弟たちよ』と呼んで、ガラテヤのクリスチャンたちにこのことを呼びかけています。今読んだところをいくつかの聖書のバージョンで皆さんにご紹介したいと思います。まずは新共同訳聖書のバージョン。それは『兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、“霊”に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。』勿論同じような訳になっているのですが、ただいろいろな言葉のニュアンスがその聖句の深みをもたらすと思いますので、いろいろな言葉の表現も心に留めて頂きたいと思います。次に口語訳では『兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい。』共同訳と口語訳、そして新改訳は日本の教会では公用聖書、パブリックに使われる聖書として普及しているわけですが、他にもいろいろな聖書の翻訳があります。例えば岩波訳というものでは 1 部分だけご紹介すると『兄弟たちよ、もしもある人が軽率にも何らかの罪過に陥ったとしても』新共同訳と口語訳をミックスしたような感じです。「不注意にも何かの罪に陥ったなら」というのが新共同訳で、また口語訳では「ある人が罪過に陥っていることがわかったなら」、そして岩波では「もしもある人が軽率にも何らかの罪過に陥ったとしても」と。似たり寄ったりというところもありますけれども、若干その言葉遣いによってまた目が開かれたり、新たな光が当てられたりして、理解もまた深まっていくと思われませう。もう一つ詳訳聖書では(ギリシャ語のニュアンスを極力汲み取って翻訳した聖書であります。それによりますと)『兄弟たちよ。もしだれかが何かの過ち(罪に陥ったならば)聖霊の人(聖霊に応答し聖霊に支配されている人々)であるあなたがたは、自分もまた誘惑されることのないように自分自身に注意深く目をとめることをやめないで、少しの優越感も持たないで(柔和の限りを尽くして)、その人を正しくする(引き戻す、元通りにする)ことをしなければなりません。』少しの優越感も持たないで、柔和の限りを尽くしてその人を正しくする(引き戻す、元通りにする)ことに尽力しなければいけないと言っております。もう一つは(これは厳密には翻訳聖書とは言えないでしょうけれども)リビングバイブルというものがあります。非常に分かりやすいものとして多くのクリスチャンにも重宝されていると思われませうが、それによると『愛する皆さん。1 人のクリスチャンが何か過ちを犯した場合、神様を敬っているあなた方は優しく謙遜な気持ちでその人を助け、正しい道に立ち返らせてやりなさい。同時に今度は自分が悪の道に落ち込むかもしれないと心を引き締めなさい。』特に私が気に入っているところは最後の末尾のところ。「同時に今度は自分が悪の道に落ち込むかもしれないと心を引き締めなさい。」私たちは人の粗あらを見るとついついそこに目が止まってしまっ、自分から目を離してしまいがちです。「あの人

はあんなことをやった。あんなことを言った。とんでもない奴だ。トラブルメーカーだ。」と言って私たちはついその人に焦点を当ててしまいます。でも気を付けなくてははいけません。自分も同じ過ちを犯しかねないということです。若しくは自分はその人よりもひょっとしたら大きな過ちを今現在犯しているかもしれない。兄弟の目の中のちりをとらせて下さいと言いながら、自分の目の中に大きな梁があるかもしれない。おがくずではなくて、丸太棒に私たちは気付かないこともありますから、そういう意味では柔和と共に。謙遜さというものも問われているわけです。イエス・キリストの性格にも「わたしは心優しく(つまり柔和で)へりくだっているから(謙遜だから)」と、キリストのキャラクターが私たちのキャラクターでなければいけません。特にそれが問題が発生したときに問われるということです。問題が発生した時にこそ私たちは果たしてキリストのようであるか、キリスト的であるかどうか、このことが問われるということです。何故こんな問題ばかり重ねて繰り返し発生するのかといぶかしく思うこともあれば、面倒に思ってしまうこともあるでしょう。でも多くの場合は、主はそのことをすべてご存知の上で敢えて許されている。そして、そこで問われる事は、人がどうのこうのではなくてあなたがどうなのか。私は果たしてこの人に対して、この問題に対して柔和であるのか、柔和に対処しているかどうか。そして、へりくだって自分もひょっとしたら同じことをしてはいないだろうか。または自分も注意しなければ、同じような過ちに陥ってしまうかもしれないというその恐れではなくて謙遜さです。柔和、謙遜、そのことを先ず初めに皆さんにも問いたいと思います。

そして、1 節のところで『御霊の人であるあなたがたは』とあります。霊的な人、スピリチュアルな人であるならば、正しなさいと言っています。その一方で御霊と対比されるのは“肉”です。これまでも御霊と肉の対比を、コントラストをずっとガラテヤ人への手紙を通して見てきたわけです。御霊の人はその兄弟の過ちを見て見ぬふりをするのではなくて、正すと言っています。しかも柔和な心で謙遜に、へりくだっている。一方で肉の人はどうなのか。御霊の人は正す。肉の人はただ責める。正すのではなくて、ただ責める。肉の人はただ非難するのです。御霊の人は正すのです。そこが大きな違いです。御霊の人は正すけれども、肉の人はただ責める、ただ非難する、ただ断罪する。その違いも是非しっかりと皆さんの中にもコントラストとして明確に線引きをして区分けして頂きたいと思います。ただ責めていないでしょうか。ただ非難していないでしょうか。ただ裁いていないでしょうか。御霊の人であるあなたは、兄弟の過ちを見たならば見て見ぬふりをするのではなくて、聞き流すのではなくて、放っておくのではなくて、正してあげる必要があります。ただし、その際に注意しなければいけないのは柔和な心です。御霊の実は何でしたか。柔和がありました。ですから御霊の人は当然のことながら柔和でなければいけませんし、そしてへりくだって謙遜に、決して他人事と思わずに、対岸の火事と思わずに、我がことのようにして「私もこの人と同じほど弱い。もしかしたらこの人以下じゃないか。」と上から目線ではなくて、自分の方が下であると。互いに私たちは、お互いにへりくだって相手を優れた者と見なければいけない。これがキリストのうちに見られる心構えでもあるとピリピ 2 章で私たちは学んできたわけです。その謙遜さ、忘れてはなりません。

そしてもう一つ、このガラテヤ 6 章 1 節を読みますと私はノアとノアの息子たちのある事件を思い起こします。それは創世記 9 章 21～23 節に記録されております。『²¹ ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。²² カナンの父ハムは(ハムというのがノアの息子です。カナンというのは実際にはノアの孫ということです。)の父ハムは、外にいるふたりの兄弟に告げた。²³ それでセムとヤペテは着物を取って、自分たちふたりの肩に掛け、(父の裸を見ないように)うしろ向きに歩いて行って、父の裸をおおった。(ノアの醜態をカバーしたわけです。罪の露わな醜い姿を覆い隠したということです。)彼らは顔をそむけて、父の裸を見なかった。』と。これについて今詳しく解説することは避けます。ただここで大切な事は、『兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。』とはどういうことなのか。具体的にいろいろなことが起きます。いろいろな問題が発生します。皆さんの身近な兄弟姉妹が過ちを犯すわけです。その際にあなたはこの聖句をどのように当てはめますかということです。ノアの息子のセムとヤペテはまさにガラテヤ 6 章 1 節をこのように具体的に実践したということです。これは第一ペテロ 4 章 8 節の聖句とも重なります。『何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。』愛は多くの罪をカバーすると。セムとヤペテのやった事は、まさに愛から

出たことです。末の息子のハムは父の大失態を兄弟たちに告げようとしたわけです。「親父はあんなことをやっている。あんなことをやった。とんでもないことをやった。」指をさして、そして人に言いふらそうとしたわけです。それは愛から出たものではありません。兄弟が、姉妹が罪に陥った時、あなたはその罪を愛をもってカバーしようと心がけるでしょうか。それとも他の兄弟にも告げてやれと、他の兄弟にも言いふらしてやれと。それは愛のない行為であります。それは肉の人のやることであります。御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその兄弟の過ちを愛をもってカバーしなくてはなりません。御霊の実は愛です。そしてその中に柔和も含まれているわけです。ですから柔和な心で正すというのは、まさに愛をもって兄弟の過ちをカバーするように、私たちが対処すべきだということです。

かつては主と共に歩んでいたのに。あんなにもクリスチャンとして熱心だったのに。いつの間にか、若しくは突然全く冷え切ってしまったように、もうイエス・キリストのことなど口にしなくなって、もう聖書を読んだり祈ったり足繁く教会に通うようなことがなくなってしまい、もはや教会にすら寄り付かない。そしてクリスチャンたちとの交わりを避けるようになり、気が付いたら姿を消していた。そんな人たちがあなたの周りに最近増えてきたように感じられているでしょうか。あんなに熱心だったのに、一緒に聖書を学んだのに、一緒に賛美して、一緒にいろいろな奉仕もしたのに。でも、いつのまにかあの人には姿を消していた。もはやあの方は主と共に歩んでいない。全然クリスチャンらしくない。御言葉に聞き従おうともしない。自分の考えに凝り固まって、むしろこの世のいろいろなアドバイスに傾いていく。そういう人たちがあなたの周りでどうも増えてきているように感じている。なぜなのか分からないけれども、なんかそういう人たちがやたら増えているような、そういう増加傾向にあるように思う。よく分からないけれども、でもなぜかどういふわけか、そういう人が増えてきているように思うと、皆さんの中にもしそういう意識があるならば、そしてそのことで困惑しているという人があるならば。または驚いてショックを受けているという人があるならば、是非知って頂きたいと思います。今は世の終りであるということです。マタイ 24 章 12 節に世の終りとはどのような時代なのか、イエスが語っております。『不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。』特に注目して頂きたいのは、多くの人たちの愛は冷たくなると。理由は不法がはびこるので。世の終りになりますと不法がはびこるので。不法というのは勿論神の御言葉に反することです。律法に反すること。キリストに対する反対勢力がますます力を得ていくような、それが世の終りの時代です。そうすると愛が冷めていく。勿論この愛というのは、先ず第一として神様に対する愛です。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして私たちはこの神を愛するように。これが第一の戒め、これが最も大切な戒めであると聖書は教えていますが、でも世の終りになるとその神に対する愛が冷めていく、冷たくなっていく。そして勿論これは隣人に対しての愛も同じです。隣人に対する愛、兄弟に対する愛。神を愛するというならば私たちは目に見える兄弟をも愛すべきです。神から生まれた者をも愛するべきなんです。ところが人に対して、隣人、兄弟たちに対して愛を示していくということが見られなくなります。または神の御言葉に対する愛、または神の民、神の教会に対する愛。もう御言葉なんかどうだっていい。もう教会なんかどうだっていい。もうクリスチャンの交わりなんかどうだっていい。愛が冷めてしまいます。愛が冷え切っていきます。

マタイ 10 章 34 節以降も皆さんに見て頂きたいと思います。『³⁴わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っ
てはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。³⁵ なぜなら、
わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。³⁶ さらに、家族の者
がその人の敵となります。³⁷ わたしよりも(イエス・キリストよりも)父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではあり
ません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。³⁸ 自分の十字架を負っ
てわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。』世の終りになりますと愛が冷め、冷え切っ
ていきます。イエス・キリストよりも父や母を愛する。イエス・キリストよりも夫を愛する、妻を愛する、息子や娘や孫を愛
する。これは世の終りの特徴なのです。教会に行くことよりも家族で過ごす事。家族で過ごすことがダメと言っている
のではありません、いけないと言っているのではありません。どちらが優先順位とされるべきかということイエスは言
われているわけです。逆に言えば、本当にあなたが家族を愛するならば、あなたはイエスを最愛の人としなければ
いけません。イエスを最愛の人とするならば、あなたはイエスのおられるところに行くでしょうし、イエスとしっかり時間

を過ごすと思います。なのにあなたはイエスよりも家族の方が大事だと。家族の必要に対して応えようとする、家族と一緒にいた方が良くと思う。本当にそうなのでしょうか。考えて頂きたいと思います。あなたが家族を救うことが出来るでしょうか。あなたはイエス・キリストよりも家族のことを愛しているのでしょうか。絶対にそんな事はないと思います。ですから本当に家族を愛するならば、あなたはイエスを 1 番としなくてははいけません。でも世の終りになるとそうなくなってしまうわけです。神よりも仕事、神よりも家族、神よりも自分。これは世の終りの特徴です。

第二テモテ3章1節。ここも世の終りについて、終末について書いています。『**終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。**』世の終りはイエスによれば愛がどんどん冷めていく。神様は二の次三の次。神よりも他のものと。神よりも家族、神よりも自分、神よりも自分の仕事。そしてそれは実に困難な時代であると。そしてその後**2節**には『**2**そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、』とリストは続きます。でもそのトップにあるのは、**自分を愛する**ということです。そしてその次が**金を愛する**です。よくよく考えてみて下さい。神様は二の次、教会に行くよりも家族と時間を過ごす。それはよくよく考えたら自分を愛していることです。家族に嫌われたくないからです。よくよく考えればそれは神よりも金を愛するからです。困難な時代です。こういうことを話してもなかなか理解されません。この“**困難**”という言葉は、「**厳しい、過酷、無情、敵意ある、荒々しい、危険である**」というふうにも訳されます。“**ハレパース**”というギリシャ語です。でも、そのギリシャ語の“**ハレパース**”という言葉を原意から探りますと、「**力**が減退していく。力が弱体化していく。」勿論私たちは世の終りは何の“**力**”かという、それは愛の力です。神に対する愛がどんどん弱体化していくわけです。そして、神よりも他のものへそれが移っていくわけです。神よりも自分、神よりも金というふうになるわけです。だから驚いてはなりません。不思議だと思わないで下さい。おかしいと思わないで下さい。首ばかり傾げないで下さい。教会の中で神よりも家族を愛する、神よりも仕事を愛する、神よりも自分を愛する。そういう人たちが増えていっても不思議に思わないで下さい。そして彼らはいつしか力を失い、信仰を失い、そして神からも神の民からも教会からも御言葉からも離れていきます。愛が完全に冷えてしまうわけです。

黙示録によれば(**黙示録3章**にあります。)ラオデキヤの教会は世の終りの教会を象徴しております。そしてラオデキヤの教会とは、熱くも冷たくもない生ぬるい教会です。神を信じているかといえ、信じていると言います。でも本当は信じていないのです。ニュートラルな中立的な状態を保っているのは卑怯です。ずるいです。神を信じているならば、信じている通りに生活しなければいけません。でも実際には口先だけで「私は神を信じているからクリスチャンです。だからクリスチャンである限り別に地獄に落ちるわけではないから。天国に行けるわけだから、それでいいじゃないですか。」と。そういう人たちに皆さんも会うこともあると思います。そしてそういう人たちがどんどん増えていきます。ラオデキヤのような状態です。熱くもなく冷たくもない生ぬるい人たち、そういう人たちはイエスの口からは吐き出されると。これはイエスの言葉であります。気持ち悪いから吐き出すと。生ぬるいクリスチャンはイエスにとっては気持ち悪いというわけです。吐き出したくなる。余程のことです。私の言葉ではありません。イエスの言葉です。ですから是非厳粛に受け止めて下さい。人がどう言おうと、誰にどう言われようと、私たちはイエス・キリストが何と言われるかに最大の関心を払う者であります。イエスがどう見ているのか。イエスがどう感じているのか。あなたがどう感じるか、人がどう感じるかはどうでもいいことです。むしろイエスがどう言われるのか、どう感じるのか。そんなこともどうでもいいと思うならば、重症だと思います。「聖書になんと書いてようと、そんな俺には関係ない、私には関係ない。」と言うならば、本当にその人が救われているかどうか疑わしいと私は思います。ですが皆さんはそうでない者だということをお私に信じていたい。でも分かりません。今は熱心かもしれませんが、来年の今頃はここに居ないかもしれません。今はそういう時代なのです。困難な時代なのです。愛が冷めてしまう時代です。心備えをしなければいけません。いちいちショックを受けてはなりません。「なぜあの人、あんなにも熱心だった人が、仲間だと思っていたのに、同じメンバーだと思っていたのに、同じクリスチャンだと思っていたのに、どうしてなのか。」と。どうしてなのかという事は今説明したわけですから、もう驚かないで下さい。当たり前だと思って下さい。当然だと思って欲しいと思います。今

はそういう時代なのです。だからといって諦めよとか。だからといってただ落ち込めとか。もう希望がないというふうに見切りをつけろと言っているではありません。そうではなくて、今日のテキストにあるように**ガラテヤ 6章 1節**です。兄弟の誰かが過ちに陥ったならば、あなたは放置して良いと言われてはいません。柔和な心で正してあげなさいと。「どのように正したら良いかわかりません。」その人のために今日この時間が備えられているということも覚えて欲しいと思います。愛が冷え切ってしまう、困難な時代において私たちは常にこの時代とこの勢力とこの流れと戦って行かなければいけないのです。流れに逆らっていかなくてはならない。この時流に^{あらが}抗うものでなければいけない。プロテストしなければいけない。それがプロテスタントです。抗議する者です。この時代の流れに対して、愛が冷めきってしまうこの状況に対して、この困難な時代において私たちは流れに逆らうべく立ち上がって戦わなければいけないのです。流されるままではダメなのです。声を上げなくてはなりません。抗議しなくてはなりません。ただし、そのプロテストは**ガラテヤ 6章 1節**に則ったものでなければなりません。当然それは熾烈^{しれつ}なものとなります。世の終りには当然サタンものたうち回るようにして、イエス・キリストが戻って来られたらサタンは完全に屈服させられ、そしてゲヘナに投げ込まれてしまいますから、1人でも多くの者を道連れにということでこれまで以上にこの世の終わりの時代においてサタンの攻勢が強くなって、そしてサタンがまさにのたうち回るようにして多くの者を巻き込もうとするわけです。その結果沢山の戦いの負傷者も続出するわけであります。教会はそうした負傷者の、過ちに陥って傷ついていた者たちの避難所でなければなりません。シェルターでなければなりません。怪我人が担ぎ込まれるところでなければなりません。そして怪我人が癒されて、そしてまたケアをされるべきところでなければなりません。そんな人は来ないで欲しいとか、迷惑だとか、トラブルの元だから他所へ行ってくれ、ではないのです。それでは教会ではないのです。私たちは柔和な人の集団でなければなりません。謙遜な人たちの集でなければなりません。そのようにこの時代においてつまづいてしまった人、怪我をしてしまった人、そして病的になってしまった人、そういう人たちが担ぎこまれ逃げ込むところが、避難所というこの場所が教会でなければなりません。

マタイ 11章 28節にもイエスは「**すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。**」特にこの「**疲れ**」と「**重荷**」は罪から来るものです。「自らの罪によって疲れちゃった。もう正直聖書を読むのも毎日苦痛だ。祈ることも出来ない。それほど渴いてささくれて元気が出ない。教会に行くのも億劫^{おつこ}となってしまった。」でも、イエスはそんな人にも「**すべて、疲れた人、罪の重荷を負っている人は、自分で全て背負い切れない人は、自分で解決出来ない人は、燃え尽きようとしている人たちは、わたしのところに来なさい。**」イエスのところとは当然、イエスのからだである教会であります。イエスのところに来るとは、教会に来るということです。教会とはイエスを頭とするイエスのからだでありますから、イエスがそこに来なさいと。教会を造られたのは他ならぬイエス・キリストであります。なのに私たちは、疲れたから教会に行かないとか、いろいろ重荷を背負ってしまっているから教会に行かない。それは明らかにイエスに対する反抗であります。イエスの招きを突っぱねているということです。イエスよりも他の考え、イエスよりも他の手法・手段、教会よりも他の場所。イエスよりも他の人。それが世の終りの風潮であります。私たちは疲れたからこそ、重荷を負っているからこそ、教会に逃げ込むのです。そして、「イエスが休ませてあげます。」という言葉信じて教会をシェルターとするのです。主こそ、我が巖。我が避け所。それが教会というところであります。

他にも**第二テモテ 2章 22節**にこういう言葉があります。『**それで、あなたは、若い時の情欲を避け(避けなさいと。)、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。**』ここでは情欲という罪が1つクローズアップされていますけれども、その他のありとあらゆるあなたを誘惑して止まない、あなたを滅びに向かわせ罪を当てはめて頂きたいと思います。どうしても止められない。どうしても断つことの出来ない。依存してしまっている。あなたを縛りつけてしまっている。がんじがらめにしてしまっているその肉体的な問題、その罪。それを避けて教会に来なさいと言っているのです。「**きよい心で主を呼び求める人たち**」これはクリスチャンのことです。その人たちがイエスの名によって集まっているところが教会です。そして、そこで義と信仰と愛と平和を求める。これが罪に打ち勝つ方法でもあります。これが依存症を克服する方法であります。ですから教会に逃げ込む、まさに駆け込み寺みたいなのが教会だと言っているわけです。教会は避け所、避難所、シェルターです。そこでサタンの攻撃から身を守

ってもらえるわけです。罪の誘惑からもあなたは守られていくわけです。

他にも教会はいろいろなイメージ、アナロジー、いろいろな表象、象徴、聖書の中には表現豊かに記録されております。教会は避難所だけではなくて、教会は学校でもあります。第一テモテ 3 章 15 節にこういう言葉があります。『それは、たとえ私がおそくなった場合でも、神の家で(教会で)どのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。』教会は、真理の柱、土台と。真理というのは勿論御言葉です。ですから私たちはこの真理の御言葉を学ぶべく教会に集っているわけです。その意味で教会は御言葉の学校であります。御言葉は神学校でないと学べないと思ったら大間違いです。御言葉を学ぶ機関は神学校ではないのです。教会なのです。神学校は教会ではありません。

第二テモテ 2 章 15 節も見て頂きたいと思います。『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』真理の御言葉を学ぶためにあなたはフルタイムで御言葉の学生になりなさいと言っているわけです。御言葉学校の学生になるように。私たちは御言葉を学ぶために教会に集うのです。

他にも教会はトレーニングジムだというふうにも言われています。第一テモテ 4 章 7～8 節。『⁷ 俗悪で愚にもつかぬ空想話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分を鍛錬しなさい。⁸ 肉体の鍛錬もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です。』鍛錬しなさい、鍛えなさいと。そして、実際に他にも第一コリント 9 章 24～27 節。ここには競技者のことが書いてあります。ランナーです、スプリンター、また拳闘する者、ボクシングする者、スポーツ選手、そのような人たちが訓練を受けるところ、鍛錬するところ、トレーニングされる場所。それが教会でもあります。第二テモテ 2 章 5 節。そこにも『また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。』と。そのようにして私たちは教会をトレーニングジムのように見なして、またはスポーツジムのように見なして筋肉を鍛え上げ、そしてそこでは当然スポーツのルールも学びながら訓練を受けるわけです。栄冠を得るためにです。

また教会はレストランのようなところでもあります。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによるのです。」とイエスはおっしゃいました。これは御言葉の学校とも似ていますが、ヘブル 5 章 12～14 節にこのように書かれております。『¹² あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく(堅い食物とは肉のことです。ステーキとか分厚い肉のことです。)、乳を(母乳を)必要とするようになっています。¹³ まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。¹⁴ しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。』いつまでもベイベークリスマンであってはなりません。教会は堅い食物も提供するところです。ステーキレストランみたいなところです。

また教会は神殿であります。これはエペソ 2:21～22 に書いてあります。私たちは神の宮である。しかも成長する宮である。このアナロジーはちょうど日曜日の講解説教のところでもソロモンの神殿と私たちの神殿を重ねながら詳しく説明しているところでもあります。ペテロも「私たちは霊の家に築き上げられるように。ひとりひとは生ける石である。」とも言われています。またヘブル 13:15 には「私たちはこの神殿において、神の教会において生贄を捧げるものです。」教会は生贄を捧げるところ。だから礼拝です。その生贄とは賛美の生贄です。ですからそれはまさに礼拝所ということです。私たちは生贄、礼拝を捧げるために教会に集ってくるわけです。

また教会は旅行会社のようなところです。私たちはどこに向かっているのか。天国です。天国トラベルです。天国行きのチケットを私たちは頂いています。そして、そのチケットは、私があなたがチケット代を払ったものではありません。このチケット代を払って下さったのは、私たちの主イエス・キリストです。そのお方がご自身の命の代価をもって天国行きのチケットの代金を払って下さったのです。天国旅行が私たちには与えられているのです。そして教会は旅行会社のようなところですから、そのチケットがあなたのためにしっかりと予約されて、そしてその代金はもう支払い済みであるというところを確認する機関です。confirmation ということをよくいたします。飛行機のチケットを買っ

たらその確認をするために私たちは confirmation するわけです。まさに教会はそういうところです。あなたの救いが確かなのかどうか。本当に救われているかどうか。自称クリスチャンかどうか。教会はそのことを確信させる、確認させるところでもあります。

そして同時に教会は大使館のようなところです。教会は神の国の代表、大使館であります。**エペソ 6:20**。パウロはキリストのために私は大使となっていると言いました。また**第二コリント 5:20** では、パウロは「あなたがたはキリストの使節です。」大使、若しくは大使館の職員だと言っているわけです。あなたは神の国の代表です。この地球という外国に来ているわけです。異星に来ているのです。ですから地球人からしたら私たちはエイリアンです。私たちこそ外人です。外国人です。神の国の人、天国の人です。でも天国とはどういうところなのかというところを私たちはこの大使館において、この地球人に発信するわけです。そして、すべての人は神の国に、天国に招かれて、そしてそのチケット代も払われているということを、さっきの旅行会社が証明するわけです。

同時に教会は軍隊の兵舎のようなところ、若しくは司令部のようなところです。**第二テモテ 2章 3~4節**。『³キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともしてください。⁴ 兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。』教会はキリストの立派な兵士たちの集いであり、ここは兵舎であります。ここで私たちは司令官から、万軍の主から指令を受けて、そして遣わされていくわけです。この世には神に敵対する勢力がうようよしているわけです。勿論万軍の主は既にその勢力の頭であるこの世の神、この世を支配するものと呼ばれるサタンにはもう勝利されていますが、サタンはまだゲリラ戦を率いて敗北したにもかかわらずまだこの世で1人でも多くの者を道連れにしようと誘惑を仕掛けてきたり、圧力を仕掛けてきたり、攻撃を仕掛けてきたりしますので、霊の戦いというのがあるわけです。それに対して私たちは処理班として遣わされているわけです。

そして**第一コリント 9:7**にも教会が兵舎であるということが書いてあります。その他にも沢山教会がどういう所なのか、いろいろなイメージがありますし、聖書に書かれていないようなイメージも勿論当てはめることが出来ようかと思えます。でもここで教会とは病院のようなところだということも押さえて頂いて、それがまさにこの**ガラテヤ 6:1** で実はパウロが私たちにイメージさせようとしている教会の姿です。**ガラテヤ 6:1** からイメージされる教会とは、実は病院のようなところというものです。後でなぜそうなのかという話はしたいと思いますが、教会は病院のようなところ、ホスピタルです。そしてただの病院というよりもむしろ野戦病院のようなイメージの方がぴったりくると思います。きれいな総合病院というよりも野戦病院です。戦いの中に、戦争の最中に、そこに命も顧みずに負傷した人たちを敵味方関係なく受け入れる、そういう野戦病院のイメージを持って頂きたいと思えます。事実、今日の病院というのは元々は野戦病院がその起源でありました。そしてその野戦病院となったのは実は教会です。世界中にある病院の本は実は教会の中に置かれた野戦病院です。文字通り教会が野戦病院となったのです。ですから赤十字なんかはその最たるものです。あの十字は当然本来は十字架、教会のシンボルなわけです。ですから病院は教会を真似ただけです。病院のオリジナルは教会なのです。教会とは常に病院のようなところではなければいけないのです。「何故こんな人が教会にいるのですか。どうしてあんな人が教会に来るのですか、来れるのですか。とんでもない人です。あんな人が教会に出入りするなんて。とんでもないです。信じられません。あの人がどういう人か、あなたは知っているのですか。とてもクリスチャンとは思えない。あの人はおかしい、変だ、異常だ、病的だ。」そうです。まさにそういう人こそ教会に来るべきなのです。来なければいけないのです。教会は病院です。ですから教会には病的な人が来るのです。教会に居るあなたは病人です。病院は病的な人たちが必然的に集まってくる場所です。病院ではいちいち病人が他の病人を見て「あの方は病気が。」とは言いません。そんな事は当たり前ですから。病人が病人を見て「あの方は病気が。あの方はおかしい。」とか、そういう事は言わないわけです。病気だから当然病院に居るわけです。若しくは怪我をしたから病院に居るわけであり、もし病人が、病院がどういうところかも分からずに「どうしてあの方がここに居るのか。」といぶかしく思って、おかしいと思っているならば、その人は別の病院に行った方が良いでしょう。冗談ですけども、本当にその人は病的だと思います。同じように教会に来て「どうしてあの方が居るのですか。どう

してこんな人が出入り出来るのですか。」そういうふうにいるあなたこそ、最も病的だということを知らなくてはいけません。厳しいかもしれませんが、それが事実です。さて病院ならば当然そこには様々な病人が集まってきます。そして様々な病気も持ち込まれるわけです。当然のことながらその病気の原因となるようないろいろな病原菌と呼ばれるもの、いろいろな細菌、ウイルスも病院には沢山集まってくるわけです。そういう病原菌とかウイルス、細菌というものが病院には必ずあるわけです。避けられないわけです。でもそういうものを勿論消毒しなければ、感染してしまいますので、当然病院には消毒臭が漂っているわけです。最近では現代の病院ではこの消毒臭は少なくなってきました。でも昔だったら「なんか消毒臭い。」と。それが病院で「だから病院には行きたくないのだ。」という人もあったと思いますが、病院には当然入院患者も沢山居て、身動き取れない人たちもいっぱいいます。自分でトイレに行けない人もいます。オムツをしている人もいます。当然尿瓶もあるわけです。排泄物の匂いがするわけです。いつもしている訳ではありませんけれども、でも時に病院にいと臭い。悪臭を嗅ぎとることもあるわけです。お風呂に入れない人たちもいっぱいいます。体臭が漂っているとか、または「血生臭い」患部がちょっと腐敗して、腐敗臭のような臭いにおいも時に感じるわけですが、でもそれが病院です。臭くてもそこには病人が集まっている、けが人が集まっている。だからそれが当然なわけです。教会も病院のようなところですよ。時に「臭いな」と思うことがあるわけです。時に汚い者も居るわけです。「何だこれは」と。でも、だからといってそういうものがいつまでも放置されるところではないわけです。消毒臭がしてきます。いろいろな処置もなされます。でもその中で度々排泄物の匂いが鼻についたり、肉が腐っているような腐敗臭が漂ってきたり、体臭が、いろいろな匂いが、鼻に付くというようなことがたまにあるわけです。でもそれらが必ず消されるということ。それは礼拝というものによって、あのベタニヤのマリアがナルドの香油をイエスに塗付けて、そしてイエスを拝して、その香りが家全体に満ち満ちたように。礼拝によってそうした悪臭が消し去られてキリストの香りが充満するということが教会の中では行われます。それがいわば消毒臭のようなものです。消臭効果、これは礼拝によって成されるわけです。でも、その礼拝が成されなくなると臭いばかりがどんどん立ち込めてくるわけです。教会で礼拝しなくなったら、教会は消毒出来ていない。いろいろな汚物だとか、または血まみれの包帯だとか、または洗ってもない洗濯物、そういったものが大量に放置されて臭いばかりが立ち込めている臭いところというふうになってしまうわけです。そして当然そういうところは不衛生で感染の恐れが大きくなってしまいます。教会に行ったら余計に状態が悪くなる。あつてはならないことです。でも病院は悪臭の原因となるものが必ず存在するところだということをいつも心に留めて下さい。その悪臭の原因となるものを目にしたからといってパニックしないで下さい。「まさか教会で。」なんて思わないで下さい。教会だからこそ、とと思って下さい。こんな罪は世の中でも見ないほど、コリントの教会にはあったわけです。自分の父の妻と、これは義理の母ということなんですが、性的関係を持っている。そんな人たちがコリントの教会にいて、そしてコリントの教会の人たちもそんな罪を犯している、コリントの不道德な街でも滅多に見ないようなそんな罪を平気で教会の一員として行っている。それをまた容認している、放置している。そんなことすら教会の中で見受けられるということ。そこには罪があるのです。そこには汚物があるのです。そこには細菌、ウイルス、様々な感染を引き起こすような危険なものも確かにあるのです。**箴言 14 章 4 節**を今度は開いてみて下さい。『牛がいなければ飼葉おけはきれいだ。しかし牛の力によって収穫は多くなる。』牛がいなければ確かに牛舎はきれいです。牛糞もありません。何の匂いもありません。馬草があちこちに散乱しているとか、ハエがあちこち飛び回っているとか、そういう事はありません。でも牛がいなければ牛舎の意味がないわけです。何のための建物か分からない。何の利益もオーナーにはもたらさないわけです。でも牛を飼うという事は、当然牛糞は避けられないわけです。当然ハエも入ってきます。当然悪臭もします。汚れもあるわけです。掃除もしなければいけません。消毒もしなければいけません。人を助けたいと思うなら、汚れだとか、悪臭だとか、トラブルだとか、問題だとか、そうしたものを私たちは避けては通れないということ。教会の中に病人、病気の原因、様々な害をもたらすようなもの、それが見受けられるのは避けられない当然のことであるということ。もし、それらをすべて排除してしまうならば、教会は教会としての存在意義はなくなるということ。ただの綺麗な空っぽの建物ということ。そんなものに何百万何千万何億なんてかけたって意味がないということ。なのに私たちはその意味のない教会を

理想の教会と考えたりします。病人が 1 人も居ないそういう病院。アホらしい話です。悪臭が何もない、何の廃棄物も出ない、医療の産廃のそんな危険なものも一切排出しない、当病院は素晴らしい病院ですなんて言っても、病人が 1 人もいなければ馬鹿みたいな話であります。教会もそういうところです。

でもその一方で、いくら人を助けたいと思っても、野戦病院のつもりでも、不衛生な状態のままではこれは却って感染したりして、病院に入ってしまったら新たに病気が新たにまた移ってしまって、もっとトラブルは増えてしまう。それは困るわけです。使い古しの注射器があちこちに散乱しているとか、血まみれの包帯があちこちに転がっているとか、いろいろな尿瓶が放置されているとか、そういう不衛生なもの、汚れたもの、そんなものが放置されたままの病院では却って危険なわけです。教会も同じです。わずかなパン種が教会全体を膨らませてしまう。**第一コリント 5 章 6 ~9 節**を読みたいと思います。『**あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。**⁷新しい粉のかたまりのままに、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。⁸ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種の入らない、**純粋で真実なパンで、祭り(礼拝)をしようではありませんか。**』ということです。確かに礼拝によって悪臭は消し去られます、排除されます。でも、それは臭いだけが残ったものです。臭いの原因がそのままそこにあり続ける限り、いくら礼拝をしようとも悪臭はさらに増し加わって、更に感染の恐れも拡大するわけです。危険がますます増加してしまうわけです。目に見えないようなほんのわずかなパン種のような罪が教会の中に放置されれば、それが驚くほど大きく膨らんでいく。罪を放置する、汚物を放置する、細菌を放置する。その罪がもたらす甚大な影響、それが教会全体に腐敗をもたらす、拡大していく、拡散していくということも忘れてはなりません。

今のが**ガラテヤ 6 章 1 節**のイントロダクションです。これから**ガラテヤ 6 章 1 節**に入りたいと思います。もう一度読みます。『兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、**柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。**』“正してあげなさい”という言葉はギリシャ語で“カタルティゾー”と言います。この“カタルティゾー”という言葉は医学用語です。この医療の専門用語はどんな意味かと言います「骨折を治す」という言葉です。原意は「骨折を治す」。だから、「元通りにする、正す」というふうに訳されるわけです。骨接ぎと言っていいと思います。「壊れたものを、折れたものを元通りに修復する」というのがそこから転じて、ここでは「正してあげなさい」と訳しています。でもそれは元々医療用語であるということです。医療用語が使われているので教会は病院のようなところだと言えるわけです。勿論イエス・キリストも「わたしは正しい人を招くためではなく、**罪人を招くために来た**」丈夫な人ではなく病人を招くためにということをおっしゃっています。ですからこのこともまさに教会はイエスという文字通りの神の手を持った名医がおられる病院です。ここに連れてくればどんな病気もどんな怪我も治るのです。だから中風の人を 4 人の友人がイエスに診せようと必死になって、手段を選ばずに屋根に登って屋根に穴を開けてまで「イエスに診てもらおう。イエスならば癒して下さるに違いない。」そのイエスがおられるのが教会であります。そして、私たちもそのイエスの元で訓練を受けて、そしてイエスの医療スタッフとして私たちも誰かが病気になったり怪我をしたら、その人たちをケアする。骨接ぎをして壊れたものを元通りに直してあげる。そういう医療に、霊的医療に従事する者だということを。私たちクリスチャンも 1 人 1 人霊的メディカルケアをする者だということをパウロは教えているわけであります。その際には「**柔和な心で**」とあります。“柔和”という言葉は御霊の実にところでも詳しく説明しました。ギリシャ語では“プラオテース”という言葉が使われています。この“プラオテース”という言葉は「他人の弱さに適応出来る強さを備えるもの」です。外側に現れる感情ではなく、内側にある神に対する平穩、これを柔和と言います。アリストテレスの定義によれば、この“プラオテース”という言葉は「両極端の間」というふうに説明されます。「両極端の間」というのは、つまり中庸ということです。そして具体的には「制御不能なコントロール出来ない不当な怒りと、何があろうと全く怒らない状態の間」それがプラオテースであります。砕けて言うならば「やたらに怒りっぽいのではなく、怒ることが全く出来ないのでもなく、適切に怒るべき時には怒り、怒るべきでない時には怒らない。」それが柔和です。柔和は怒りによって見境がつかなくなってしまうものではなくて、怒る

べき時と場合を判断出来るもの。それが柔和であります。それは自分で結ぶものではなくて、御霊が結ぶものだと言ってきたわけです。御霊の人であるならば、必ずこの柔和さが身につけているはずですよ。なければあなたはただの肉の人です。御霊の人は正すことが出来ます。肉の人は、ただ責めるしか出来ないです。ただ非難、ただ裁くことしか出来ないのです。御霊の人だけが正すことが出来ます。

また“あやまち”という言葉も原語で紹介したいと思います。『もしだれかがあやまちに陥ったなら』他の聖書の訳では“罪過”などとも訳されています。“パラプトマー”というのがギリシャ語です。これは勿論「過ち」と訳される言葉ですが、他にもふいに罪を犯してしまったという「過失」。また軽率に罪を犯してしまったという「失敗」です。また「つまづき」とか「しくじり」また「ミス」などとも訳しても差し支えないと思います。「ドジ」とか「へま」、そういったいろいろな言葉を皆さんイメージして頂きたいと思います。「過ち、失敗、過失、つまづき、ミス、ドジ、へま、しくじり、間違え」そういったイメージです。ですから“あやまち”と言っても、むしろ意図的に反逆心から積極的におぞましい大きな罪を犯すというのではなくて、「ドジってしまった。ミスってしまった。へまを犯した。つまづいてしまった。」というイメージをここで持って頂きたいと思います。厳密にはそのような意味があるということを知って頂きたいと思います。そして“**陥る**”という言葉。これもギリシャ語ですと“プロランパノー”と言います。これは原語のニュアンスですと「まさに肉食獣が草食獣を獲物として追い詰めている。」という言葉です。

今お話した原語のニュアンスを原意から汲み取って、この**ガラテヤ 6:1**の内容を砕けて言いますと「自らの過ちによって敵に追い詰められて、そしてその時に骨折して動けなくなっている人」です。もう餌食にされるばかりの人です。自らの判断ミスか何かで、自らのちょっとした軽率な失敗によって、思わず痛手を被り骨を折ってしまっただけで歩けなくなって、そして敵はまさにあなたを餌食にしようと、まさに食物にされる場所。そういうイメージを今持って頂きたいと思います。そしてそういう人をあなたが見かけたならば、「ざまあ見ろ」ではないのです。「自業自得だ」ではないのです。御霊の人であるあなただったら、それは出来ないはずですよ。見て見ぬふりは出来ないはずですよ。あなたはその兄弟を正してあげる。その骨折を直してあげる。骨接ぎをしてあげなくてはならないと、パウロは言っているわけです。実践して適用すること。特に兄弟が過ちに陥った時、あなたは御霊の実を結ぶということは一体どういうことか問われつつ、そしてそれを実際に当てはめていく、実行していくということが勧められているわけです。その原因が何かは、必ずしも知る必要はありません。もしかしたらその人自身の本当につまらない判断ミス、ただの愚かしさから、若しくは何も分かっていなかったから、無知からそのような目に自ら遭ってしまった。墓穴を掘るようなことをしてしまった。原因が何であれ、その結果骨を折って今身動きとれない状態、まさに敵に餌食にされようとしている。勿論文字通り肉体的に動けなくなってしまうこともあるでしょう。病気になってもう動けない。教会にも来れないとか。怪我をしてしまっただけでも身動きが取れない、そういうこともあるでしょうし、また感情的なレベルでもう身動きとれなくなりました。自分のちょっとした過ちによって。若しくは経済的に身動きが取れなくなりました。もう経済難で、「もうにっちもさっちもいかないのです。」生活が困窮してしまう。それはあなたの罪がそのように結果をもたらして、あなたをまさに骨折したような状態に陥らせてしまった。霊的、信仰的、いろいろな骨折があると思います。そして敵にまさに餌食にされよう、まさに絶体絶命の危機的な状況にある。そういう兄弟をあなたが見たならば、あなたは担ぎ込まなければいけません、この病院に。そしてあなた自身がケアをしてあげなくてははいけません、骨接ぎとして。リハビリも必要でしょう。なぜならば、歩けるようになるまで。正すということはそういうことです。私たちは粗探しは得意です。やたら人の罪は目につきます。でも肉の人はただそれを指差して責めるだけです。若しくは他の兄弟にハムのように言いふらして「あの人はあんなことを言った、あんなことをやった。」とただ責めるだけであります。その兄弟その姉妹の名誉を傷つけ、または貶めるようなことです。中傷するようなことをしてしまうわけです。でも御霊の人であるあなたにはセムとヤペテの責務があるということを知って欲しいと思います。後ろ向いて顔を向けず、そしてカバーしてあげることです。愛は多くの罪を覆うということを行って頂きたいです。そして当然病人ですから傍についている必要があります。そして骨を接いだあと、その骨がしっかりとくっつくまでケアをしてあげる必要があります。入院する必要があるわけです。そして歩けるようになるまで、弱ってしまったその足をもう一度リハビリによって立たせるだけではなく

て歩けるようになるまであなたは傍について理学療法士のようにして助けてあげなくてははいけないのです。そこまでが私たちに問われていることです。柔和な心で、すぐにブチ切れるのではなくて「助けてやっているのに、何だその口の利き方は。」ではないです。「こんなに世話をやっているのに、感謝もないとは一体何事か。」と、それは柔和ではないのです。イエス・キリストは私たちに模範を示されて、その模範を残されて「このようにせよ。」と有難いことに具体的な例を示して下さいました。ヨハネ 13 章には『洗足物語』の記事が記録されています。イエスは心優しくへりくだっている方、柔和で謙遜な方として、その汚い 24 個もの足を見て見ぬふりが出来なかったのです。臭ったのです。臭いのです。醜いのです。でもイエスは黙って「何だその汚い足は。」と言うのではなくて、「誰がに洗ってもらえ。」と言うのではなくて、黙って自らしもべの格好をして ^{ひざまず} 跪いて、そして黙々と弟子たちのその汚い 24 個もの足を洗い始めたわけです。そして「わたしがあなたがたの足を洗ったように、あなたがたも互いに足を洗い合うように私は模範を示した。だからこれに従うように。」と私たちにも見せてくれたわけです。汚い足を発見することは誰にも出来ます。そして私たちはそれを得意とします。すぐに臭いが検知されるわけです。臭いと、臭うと、汚いと言うわけです。指を差すだけではなくて、指を差すならばあなたは跪き、そして手ぬぐいを取ってたらいを持って、そして御言葉の水の洗いをもってその人を柔和な心で正してあげて、そして自らも同じ誘惑に陥るのではないか。また彼らと私も何ら変わらない弱さを持っている者ではないかということ認識しつつ、上から視線ではなくて、互いに自分よりも優れた者と思いながら、骨接ぎをしてあげる。ただ病院に担ぎ込むだけではなくて、実際に傍に居て声をかけ続ける。その病人が悪態をつこうともです。時に病人が看護してくれるあなたに対して汚い言葉を浴びせるかもしれません。有難迷惑だと、もう黙ってくれと、もうお前のケアなんか要らないとか、そういうことも言うかもしれませんが、そこは柔和な心でとされています。そして、そのような人たちがあなたの周りに居るかどうか、今思い巡らして欲しいと思います。

その一方で、自らのミスで、過ちで骨折し、敵に追い回されてまさに餌食になろうとする、そういう病人怪我人も目には付きます。でもそういう人ばかりではありません。中には分かっているながら、それが罪だと分かっているながら、それが神を悲しませるといことが分かっているながら、それが自らにも周囲にも多大な迷惑、また害をもたらすということが分かっているながらも開き直って、その罪を犯していることを自慢げにするようなバックスライドしている人たち、信仰の後退者、そういう人たちも私たちの周りに居るということを私たちは知っております。第一コリント 5 章 1~6 節、今私がお話したような人がそこに登場します。『¹あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。(父の妻というのは、所謂継母です。父のそばめのような存在と考えていいと思います。)² それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。³ 私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。⁴ あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、⁵ このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。』そして、その後 6 節に先ほど読んだ高慢のパン種、不正のパン種とか、悪意のパン種の話が続くわけです。このパン種を取り除かなければ、教会全体が膨らんで腐敗すると。多大な罪の影響が隅々まで及んでしまう、ということをパウロは警告しているわけです。ここに出て来ている人は、ガラテヤ 6:1 の人とは違います。過ちに陥ってしまっている人ではなくて、過ちであることが分かりながらも開き直って、しかもその罪を自慢げにおおっぴろげに犯している。そして、そのような人をコリントの教会はこともあろうに受け入れてしまっているわけです。そして、彼らもまた誇っているのです。「私たちはこんなおぞましい罪を犯している者ですら受け入れている教会です。」と。その罪を罪として排除しようとするのではなくて、パン種をそのまま残して「私たちはこんなにも寛大な寛容な教会なんです。」と。「恵みに溢れています。何をしても赦される、そういう教会なんです。同性愛者も大歓迎。」勿論この教会においても、どんなおぞましい性的な罪を犯す者でも歓迎はされますが、でもその罪までも歓迎はしません。罪は罪であるとハッキリ言います。このままあなたはこの罪を犯し続けるならば、

あなた自身も滅ぼし、そしてこの教会にも影響をもたらすということをハッキリと告げて、悔い改めを迫ります。そして勿論悔い改めた者には罪の赦しが備えられ、そしてその罪からも解放され、その罪の縛りから束縛から解放されて、そして完全に勝利出来る、克服出来る。その罪をやめて全く新しいものに造り変えられる。そういうことまでも教会は正してあげることが出来るどころです。直してあげることが出来るどころです。一生病人のままで良いのではないのです。病人が癒されるどころ、それが病院であります。でもこのコリントの教会は、癒そうともせずにその病気を誇っているわけです。我々はこんな重病人も受け入れて、どんなに恵み溢れる教会なのか、そんなことを自慢げにおおっぴろげに宣伝しているわけです。そしてその罪を犯している、母を妻にしているようなおぞましい性的不品行の罪を犯している者も大手を振って誰にも咎められることなく自慢げに信仰の後退をアピールしているわけです。バックスライドしても誇っているわけです。そういう者に対して教会はどうしなければいけないのか。パウロの指摘に私たちは従わなくてはなりません。ここではいろいろなキーワードがあります。**3節**のところに「**イエスの御名によって(名前によって)すでにさばきました。**」と。裁かなくてはいけません。でもイエス・キリストは**マタイ7章1節**で「さばいてはいけません。」とおっしゃっているじゃないですか。先週の金曜日の夜のバイブルスタディーを聞いて下さい。まさにそこを話したわけです。聖書には、「さばきなさい」とも書いてあります。ただし自分の目の中に梁があるのに、兄弟の目の中にちりがあるということで偽善的にさばいてはいけないとは言われていますが、偽善的でなければむしろクリスチャンは裁かなければいけないのです。そして裁くことが出来るのがクリスチャンであります。なぜならばクリスチャンは何が正しくて何が間違っているかわきまえているからです。識別出来るからです。主イエスの御名によって裁くとは、イエスの性質において、イエスが心優しくへりくだっている、柔和で謙遜である。そのイエスの性質、又イエスは他にも勿論罪の無い方、きよい方です。また正しく義なるお方です。イエスには力があります、権威があります。その御名は全てイエスの存在そのものを表しています。イエスのように裁くということです。そしてイエスは裁かれました。福音書を見て下さい。イエスがどのように裁いたのか。

また他にもキーワードがあります。「**あなたがたが集まったときに**」とあります。これは1人の人がまるで裁判官のように裁くのではなくて、これは教会として裁くということを意味しています。ですから先ずは私たちは**マタイ18章**の原則がありますから、もし兄弟が罪を犯したならば、イエス・キリストがその裁きの手順もあらかじめ教えてくれておりますので、その手順に従って淡々とその罪を処理していくということをいたします。そしてそれは**マタイ18章15節**以降に書いてあります。『¹⁵ また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。¹⁶ もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。¹⁷ それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、(ここまでが手順を踏まなければいけないわけです。)教会に告げなさい。(この”教会に”というのは、教会の指導者に告げなさいということです。)教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。』“異邦人か取税人のよう”というのは、不信者として、ノンクリスチャンとして扱いなさいということです。

そして、パウロは**第一コリント 5章**のところでは、まさに主イエスの御名によって、またあなたがたが集まった時に、個人的には既に罪を指摘しているわけです。でもそれでも聞かない。2人か3人の証人も連れて行ってそれでも聞かない。**4節**には「**私も、霊において共におり**」と。これはパウロの霊ですから、パウロのスピリット。パウロのスピリットとは勿論パウロの書いた手紙です。パウロの書簡に書かれている具体的な教会の中での所謂“戒規”と呼ばれるものです。教会ではこういう者に対してどのように対処しなければいけないのかというその“戒規”というものが、パウロの手紙にはたくさん触れられております。他にも**第一テモテ 1章 19～20節**。また**第二テモテ 2章 24～26節**。それがパウロの霊、スピリットです。そうした聖句を見ながら、その聖句に沿いながら、淡々と教会の中の問題を処理しなくてはならないということです。

そして、「**主イエスの権能をもって**」。これは勿論「主イエスの御名によって」と同義的に使われています。私たちは、教会はイエス・キリストの教会であるということをいつも意識しなくてははいけません。人が教会を牛耳るのではありませ

ん。人の権能によって教会を運営するものではありません。イエス・キリストがどのように見られるのか。宮清めをなさった方が何を望んでおられるのか。そのことを私たちはいつも意識しなくてはなりません。病院が不衛生なまま、汚物が放置されたまま、いろいろなウイルス、いろいろな細菌、そうした害毒が、他の者にも感染させてしまうような、パン種のようなそんな罪がそのまま置かれていることをイエス・キリストは望まれておりません。イエスは宮をきよいものとされたいと願っています。

そして「**サタンに引き渡す**」という言葉。これは **5 節**に見られます。非常にショッキング言葉です。でも誤解しないで下さい。その「**サタンに引き渡す**」というのはどういうことなのか。その後「それは彼の肉が滅ぼされるため」であると。これは決して破壊的な目的ではないということを知って下さい。肉は滅ぼされますけれども、「それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」と、むしろ建設的な目的でサタンに引き渡すということです。そして「**サタンに引き渡す**」というのは具体的に教会においては除名という形でなされます。除名、メンバーから断つということです。もう教会の出入りを許さないということです。英語で言うと“excommunication”ということです。厳しいです。でも教会全体が腐敗してしまったらどうでしょうか。そのことがその続きに書いてあります。教会全体が滅びてしまうのです。腐ったミカンという話も皆さん聞いたことがあると思いますが、でも腐ったミカンをただ排除せよと言っているではありません。確かに腐ったミカンがあれば他のミカンにも影響が及びます。腐敗が、カビが何の問題もないミカンにまで及びやすくなるわけですが、でもただの腐ったミカンという扱いではなくて、その腐ったミカンが元通りになることをパウロはここで言っているわけです。肉は滅び、でも霊が救われるため。それが教会から排除されることで起こると言っているわけです。でもこれは勿論最終手段ということ覚えて下さい。ちゃんと手順があるということ。まずは個人レベルで直接本人に言うわけです。人から聞いた話でも直接本人に言うわけです。そして 2 人か 3 人の証人を経て、さらに最終段階で教会の指導者から今度は裁きを受けるということです。そして教会の指導者からの勧告に対して、戒告に対して全く応じようとしな。それでもなお続けようとするならば、当然牧者は羊を守らなくてはなりません。苦渋の選択ですけれども、残念ですけれども、悲しいですけれども、「あなたはもうここには来てはいけません。」と。除名ということになります。それが「サタンに引き渡す」ということです。でも目的はあなたが本当に救われるため、クリスチャンのつもり、自称クリスチャンで、本当は救われていないのに救われているつもりでいたら、それこそ怖いことです。かの日にはイエスと顔と顔を合わせる時に、「あなたは知らない。全然あなたのことなど知らない。」あなたはもしかしたらクリスチャンのつもりで天国に行くつもりだったかもしれませんが、でも気付かなかった。クリスチャンのつもりで天国に行くつもりでいたのに。もう死んでイエスと向き合った時には手遅れでした。これではもう手遅れという事ですから、その前に、手遅れになる前に、本当に救われているかどうか。本当は救われていないのではないかと、このことを本人に分からせるために、あえて教会から追放するということです。除名するということです。排除するということ。これを最終手段として、教会の戒規として行うということもパウロによって示されています。「本当にでもそういう結果をもたらすのですか。」実際にここで除名された人は、後で戻って来ます。このことはコリントの学びでも詳しく教えましたので、実際に**第二コリント 2 章 6～8 節**にこの父を妻として性的罪を犯し続けて、その結果言うことを聞かずに、さらに毒付いて「私は何をしても許されるんだ。」みたいなことを言いながら、教会の中に居座ろうとしたこの人物は、結局サタンに引き渡されたのですが、その結果教会に行けなくなった結果、教会で味わえるあの祝福、あの喜び、あの平安、あの満ち、それをすべて教会から排除されたことによって見失ったわけです。味わえなくなったわけです。「教会は何と素晴らしいところだったのか、私は全く分かっていなかった。神の家族の尊さを全然知らなかった、分かっていなかった。彼らを利用するだけ利用していただけだった。」と、排除されて初めて有難味が分かる。追い出されて初めて有難味が分かる。放蕩息子の例も思い出して下さい。**ルカ 15 章**に書いてあります。放蕩息子もやりたい放題やって放蕩の限りを尽くし、でもある時飢饉によってすべてを失い、豚の餌を食べなければ食ってもいけない状態に陥ったわけです。でもその時に放蕩息子は我に返ったわけです。**ルカ 15 章 17 節**にあります。教会から追い出されて我に返るのです。豚の餌を食べて我に返るのです。「父の家では、教会では豚の餌なんか食わなかった。あんなにおいしい御言葉のごちそうが溢れていた、あんなに恵みが溢れていたのに私はそれを全く認めず

に、その価値も分からずに、ただ利用だけしていた。ただ美味しい部分だけ、甘い汁だけ吸っていた。」そのことに気付くということがあるわけです。ですから私たちもケースバイケースで**ガラテヤ 6:1** の過ちに陥ってしまった兄弟というケースもあれば、**第一コリント 5 章**のように罪だと知りながらその罪をむしろ開き直って自慢げに犯し続ける、悔い改めないバックスライダー、信仰の後退者、彼に対して、そういう人に対して、彼女に対して、そうした連中に対して、私たちがなすべき事は聖書にやはり示されているということです。

そしてもう一つ、**ヤコブの手紙 5 章 19～20 節**。教会にはまた別のタイプの病人、怪我人も居ます。罪人と言って良いと思います。『¹⁹私の兄弟たち。あなたがたのうちに、真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すようなことがあれば、²⁰ 罪人を迷いの道から引き戻す者は、罪人のたましいを死から救い出し、また、多くの罪をおおうのだということを、あなたがたは知っていなさい。』ここには“兄弟たち”と言われてますから、真理から迷い出た兄弟たち。**第一コリントの 5 章**の人は、兄弟と名乗るだけで、クリスチャンと名乗るだけで事実上は救われていなかった人のことです。自称兄弟、自称クリスチャンの話でした。でも、この**ヤコブ 5 章**の“真理から迷い出た者”は、これはまさに嘘、偽り、間違った教理によって騙されている兄弟、惑わされて欺かれているクリスチャンのことを指します。間違った教えは、間違ったライフスタイルへと私たちを導きます。ですから正しい教理を知らなくては、正しい生活を送る事は出来ませんから、この真理の御言葉は実に大切であります。この真理の御言葉を私的解釈をして、ねじ曲げたり、文脈から外して都合の良いように捉えようとするならば、間違った教理によって間違った生活(ライフスタイル)へとあなたは誘われてしまう、導かれてしまうということです。それは避けなくてははいけません。そして、そういう人たちを見かけたならば、あなたはその人を連れ戻さなくてははいけません。非聖書的な教え、反聖書的な教え、そうしたものが世の終りになるとやはり教会の中にも入り込んできます。ガラテヤの手紙の背景にもそのような異端的な非聖書的な教えが入り込んでいたということが問題となっていました。勿論私たちはそのような兄弟を見かけたならば、放置してはいけません。真理の御言葉をまっすぐに解き明かすように私たちはここに召されております。ですから皆さんは真理から迷い出たその兄弟・姉妹を引き戻してあげられる、そういう訓練を今受けているということを覚えて、資格者として、実践出来る者としてこのことを自分に当てはめて頂きたいと思います。

ここで、**ヤコブ 5 章**のところで、“死から救い出す”という言葉が使われています。罪人の魂を死から救い出す。魂というのはその人自身、その人の肉体も含めて言っています。霊ではなくて魂。魂は自分の、その本人のことを言っています。ですからここではむしろその人が肉体的に死んでしまう、罪によって。そういうケースもあるわけです。または信仰的に死んでしまうこともあるわけです。霊的に成長出来ない状態、それは死んでいる状態です。誤った教理のゆえにクリスチャンとして成長出来ない状態、それも死であります。アナニヤとサツピラのように肉体的に死んでしまうケースもあるでしょう。でも、彼らは勿論死んで天国に入れられたわけです。信じていた者が救いを失う事はありません。ただ敢えて主は肉体の死を与えるということをします。でも、地獄に行くわけではありません。肉体は滅びて、主の日にその人の霊が救われる、そういうケースも先程見ましたけれども。クリスチャンの場合でも肉体が滅ぼされることがあるわけです。それ以上罪を犯さないために、憐れみの行為として敢えてあなたの命をとられる。その代わりあなたは天国に行けるわけです。地上に長く居れば長く居るほど私たちは罪を犯すわけですから、これも憐れみだと思えます。でも、もっと地上に生かされるならば、もっと天に宝を積むというチャンスも私たちに与えられています。ですから残念ながら天に宝を積むチャンスは削がれます。でも、もし天に宝を積むようなことをしないで長生きだけをしようとするならば、ただただ罪を重ねていだけで、それは自分のためにもなりませんし、周囲のためにもなりません。神の判断によってあなたは肉体を滅ぼされると、死を迎えるという事があります。でもそうなる前に引き戻すことも出来るということを、そのことを私たちはイエスの事例からも模範として教えられております。例えば**ヨハネ 3 章**のニコデモ、彼の教理は間違っていました。実際にイエス・キリストは聖書を使いながら、**エゼキエル 37 章**の枯れた骨の話をして、実際に枯れた骨に息が吹き込まれると、それは生きた者となった。死んだ者でも神の霊が吹き込まれると、その霊は“ルーアハ”とヘブル語で言いますが、それは「風」とも訳されますし、「息吹」とも訳せますし、また「霊」というふうにも訳せる言葉です。それがギリシャ語では“**プニューマ**”と言いますが、その事例を、その聖書の聖句を

エゼキエル 37 章から使いながら、その聖書を知っているはずのイスラエルの教師と呼ばれた、神学校の校長と呼ばれたそのニコデモに対して「あなたの教理は間違っている。」とイエスは教えながら、そして彼を真理へともう一度導き入れたわけでありませぬ。そして、そのニコデモは最終的にイエスを信じるに至ります。**ヨハネ 19 章 39 節**のところで、ニコデモはイエスに対する信仰を大胆に表明します。見事にニコデモは迷いの道から引き戻されて、そして死からも救い出されたわけです。ニコデモの多くの罪はイエスによって覆われた、カバーされたわけです。イエスと同じように私たちもそういう人たちを御言葉によって引き戻すということをしなければいけません。聖書の言葉は神の言葉です。あなたの言葉によって、あなたの説得によって引き戻すではありません。神の言葉は生きていて、力があるのです。両刃の剣よりも鋭いメスだということも忘れてはなりません。**ヘブル 4:12** に書いてあります。他にも**イザヤ 55:11**、神の言葉は神の望まれることを成し遂げるまでは無駄には返って来ないということが書いてあります。ですからそのような神の言葉が神の力を発揮する。そして、罪人すらも神に立ち返らせることが出来る。そういう力があるということ。魂を救うことが出来る、その力。神の御心を成し遂げる、その力があるということ。私達は信じてこの御言葉を活用しなくてははいけません。あなたのカウンセリングによって取り戻すのではないのです、引き戻すのではないのです。神の言葉によって引き戻すのです。真理の御言葉が罪人の魂を捉える。罪人の目を開く。心のいろいろな考えやばかりごとすら御言葉が差し通して識別させるわけです。「私が間違っていた。私がおかしかった。」マインドコントロールされているような人たちに対しても、カルトの教えやいろいろな私的解釈によって歪められた曲解のその理解によって汚染されてしまったその人たちのマインドも、再び御言葉によって覚醒されて、そして気付くようになります。でも、時に人は御言葉を持ち出すと「もう御言葉なんか聞きたくない。二度と私の前で聖句を口にしてくれるな。」と。クリスチャンという人たちですら「聖書はもう要らない。そんなに聖書を引用しないでほしい。そんな手紙は要らない。」そういうことを皆さんも言われることもあるかもしれません。でも、怯まないで下さい。いくら拒まれようと、聖書は時限爆弾のようなものです。時限爆弾は時間がセットされて爆発するようにできています。神のタイミングによってその時限爆弾の御言葉がいつの日か爆発して、そしてその人の頑なさを打ち砕いて、目が開かれる。そしてようやく神の真理を素直に受け入れることが出来る。そういう日が必ず、そういうタイミングがやってくるということを皆さんは信じて、御言葉の時限爆弾を仕掛けなくてははいけないのです。すぐには爆発しないかもしれません。神がその時間をセットしているのです。あなたがセットするものではありません。今爆発して欲しいとか、あまり時間をかけずに明日とか 1 週間後位には爆発してもらいたいと、私達は望むわけですがけれども、でもそれは神様のなさることです。私達は単純に御言葉の時限爆弾を仕掛け続けるということです。そのことを今この教会においても皆さんに是非行って頂きたいと。ケースバイケースです。その対象は**ガラテヤ 6 章 1 節**の対象なのか。それとも**第一コリント 5 章**の対象なのか。または**ヤコブ 5 章**の対象なのか。ケースバイケースです。それをあなたが見分けて、識別して、そしてその都度ちゃんと聖書に記された対処法に従って、見て見ぬふりをするのではなくて、しっかりと自分の責務を淡々とこなして頂きたいと思ひます。でも、そこには愛をもって真理を語る。御霊の実を結びつつ、そこではやはり偽善的な裁きも勿論禁じられていますから、自分自身も同じ過ちに陥らないように、自分もやはり沢山の罪を犯している罪人であるということ、病人であるということを忘れずにへりくだって、上から目線ではなく、本当に兄弟を助けたいという一心で、立ち直らせてあげたい、正してあげたいし、あげなくてははいけないし、これは教会全体の問題であるから、教会全体が腐敗してはいけないし、教会全体の建物が崩壊してはいけないから、だから私たちはこのことを人のためだけではなくて、全体のためにも、他の神の家族のためにもしなければいけません。家族の中に問題児が居ても、その問題児は通常ならば戸籍から外されるという事はありません。家族でも完璧ではない人は居るわけです。たとえ同じ血の繋がっている家族でも馬が合わない、性格が合わない、どうも気が合わない、そういう人もあるわけです。でも家族は家族です。神が私達を生んで下さったのです。ですから、自分はこの人とはちょっと波長が合わないとか、どうもこの人は苦手ですとか、付き合いづらいです、何を言ったらいいか分からないし全然仲良くなれそうもないと。でも家族だということ覚えて下さい。**エペソ 2 章**に教会は神の家族だとも書いてあります。みんな家族です。問題があっても、病気でも家族は家族です。けが人でも家族は家族です。「こんな人、けが人だし、病人だし、役に立

たないし、病気が移りそうだから。」だから追い出すなんていう事はないわけです。でもわざと家族の中を乱そうとする者は、家族全体を罪に陥れようとする、そういう悪意ある者、開き直って堂々と罪を犯し続け、やめずに悔い改めない者もあるわけです。他にも騙されている人たち、目が閉じられてしまって見えなくされている者たちもあるわけです。そういう一つ一つのタイプを見極めながら、是非神の家族として、また骨接ぎをする医療スタッフとしても。また時には裁きを行わなければいけない、裁きをつけなければいけない。裁き人としても私たちは機能しなくてはなりません。

今回は**ガラテヤ 6章 2節**から、**2節**のところに『互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。』これは**1節**のことを別の言い方で言っています。特に言語のニュアンスでは、「重荷を負い続ける」継続です。1回負ってやった、で終わりではないのです。1回だけ相談に乗ってあげた、話だけは聞いてあげた、で終わってはいけないのです。骨折した人を、骨を接いただけではなくてちゃんと骨が付くまで、そして歩けるようになるまで、リハビリまで付き合っ、ねんごろに柔和な心でへりくだって、完全に立ち直るまで傍に居て援助しなくてはならない。それによって私たちはキリストの律法を全うすることが初めて出来るのです。それが、兄弟を愛するという事です。ただへらへら笑いながら「こんにちは、よく来ましたね。元気ですか。」社交辞令だけして、それで済ませようと。いかにも歓迎しているように、いかにも愛しているように、いかにも大事に思っているかのように、「あなたのために祈っていますよ。」とか。社交辞令です。勿論祈る必要もありますけれども、でも骨が折れている人を見たならば、「家に帰ってあなたのことは祈っています。」とは言わないわけです。まさに餌食になろうとしているその人を見て「あなたのために祈っていますよ。」と通り過ぎることなど私たちには出来ないはず。祈りながらもです。ちゃんと骨を接いであげる、骨折を治してあげる、正してあげる。そこまで私たちには求められている。そして私たちはそのようなケアを常にイエス・キリストから受けているということも忘れてはなりません。私たちも同じだったのです。病人だったのです。けが人だったのです。歩けなかった者です。だから人に厳しく当たってはいけません。

そして、これで終わらせて頂きたいと思いますが、**2節**から続きを見て頂ければ、もう充分基礎を今皆さんにはお伝えしましたので、その上で今回は多分**6章**最後まで行けると思います。皆さんはこの**ガラテヤ人への手紙 1～5章**まで見ましたので、復習しながら最後の本当にファイナルの、また最後の適用のところを、学んできたことを具体的に今のあなたに、今の状況にどのように当てはめていくのか。恵みの実践的適用、それを学ぶのではなくて、それを行うということです。それを心がけて最後は閉じて行きたいと思います。